

# 「Let's健康おきなわ21」



## リハビリ専門家からのメッセージ

～脳卒中発症予防とともに、患者が安心して社会復帰できるために～(下)

医療法人上善会かりゆし病院回復期リハビリテーション病棟リハビリテーション科 古橋哲専門医  
理学療法士・西原美樹課長  
理学療法士・石垣司主任

質問3. 専門家の立場で、八重山の脳卒中リハビリテーション体制について感じていることは？

若い脳卒中患者の地域での受け皿づくりが必要である！

若い方が脳卒中になった場合、職場復帰まで目指している。

入院中に職場の方とも話し合い、元の仕事に戻れるか、別の業務に変えて復職できるのかを話し合っている。

経済的な問題のためもあるが、地域との関わりを続けるためにも、目標（家庭復帰・社会復帰）まで、患者を中心に関係者でつなげていけるよう、働きかけている。

若い脳卒中患者は、職場復帰が難しくても、地域の中に出ていける場所があれば、社会復帰の可能性がある。

入院中は理学療法士以外に、作業療法士や言語聴覚士のリハビリ専門職が、職場復帰や家庭復帰に向けてリハビリをするが、退院後の長期的なフォローがなかなかできない状況である。

島内では、社会復帰のための訓練施設が少なく、他県に紹介した例がある。

また、元の職場への復帰ができない場合、就労支援につなげる援助をしているが十分ではない。

介護保険サービス等の利用に関しては、若い方は高齢者に交ざって通所介護や通所リハビリを利用したが少ない場合が多い。

質問4. 専門家の立場から、患者が退院後に家で過ごすための課題は何か？

退院後、職場復帰・家庭復帰をした方は、自動車運転が必要となるが課題が多い！

島内は、移動手段に車がないと困る。沖縄県は運転免許返納で恩典があるが、石垣市は制度等が十分でなく移動手段の制限があり、社会復帰を難しくしている現状がある。

車の運転ができない方々の支援が乏しい。

40代で脳卒中発症後、社会復帰できないことは厳しい。

特に、※高次脳機能障害がある場合は、外見からは判断しにくく、運動まひが軽くて自動車の運転動作が可能でも、運転中に危険を察知し、その場にあった対応ができない場合がある。

逆にまひが残っても、高次脳機能障害がない場合もあり、医療機関で評価し、実車テストを受けた上で免許を取得する仕組みづくり（医療機関・安全運転学校・公安委員会の円滑な連携）が急がれる。

※高次脳機能障害とは、「記憶する」「集中する」「考える」「感情をコントロールする」「コミュニケーションをとる」等、私たちが日常生活や社会生活を送ることに支障を来した状態のこと。

質問5. 専門家の立場から、リハビリ中の方々に伝えたいことは？

患者の中には、急性期から回復期に来る際に「あとはあなたの頑張り次第」と言われて来る人がいる。

家庭や地域で自分にできることから役割を見つけ、できないことは誰かに頼ることは特別なことではないと思ってほしい。後遺症となったとしても胸をはって生活していただければと思う。

患者の周囲の方々にも伝えたいこととして、患者の生活習慣に理解を示し、無理な飲食をさせない。

高次脳機能障害に対しては、私たちの助言を参考に長期的に見守っていただきたい。私たちは、患者が社会で自立していけるよう入院中から支援していく。

病状が思うように回復せず、イライラする場合は、遠慮なく私たちに愚痴を言ってほしいし、リハビリに対する意見もほしい。精神的な部分も含めて一緒にリハビリ支援していきたい。

(終わり)

記事を読んでいただいた方々、インタビューを受けていただいた方々、掲載いただいた新聞社に感謝申し上げます。

八重山保健所健康推進班 (82-4891)

「Let's健康おきなわ21」は、八重山地区健康おきなわ21推進会議の構成機関・団体が「沖縄県の健康生活に関する記事」を掲載しています。